

平成12年度サポート高松総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告

浜ノ町遺跡
高松城跡(西の丸町)
西打遺跡

2001.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、サンポート高松整備事業に伴い実施した平成12年度埋蔵文化財発掘調査及び、整理作業の概要を記録したものである。発掘調査対象遺跡は、浜ノ町遺跡^{はまのちやういせき}、高松城跡^{たかまつじょうあと}（西の丸町^{にしのみるちやう}）、整理作業対象遺跡は高松城跡（西の丸町）（平成7・8年度発掘調査）、西打遺跡^{にしうちいせき}（平成9年度発掘調査）である。

2. 本調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として実施した。

3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所 長	小 原 克 己 (2000.11 ~)
		菅 原 良 弘 (~2000.10)
	次 長	川 原 裕 章
総務	副 主 幹	六 車 正 憲
	副 主 幹	大 西 誠 治
	主 事	高 木 康 晴
調査	参 事	長 尾 重 盛
	主任文化財専門員	藤 好 史 郎
	文化財専門員	古 野 徳 久
	文化財専門員	黒 川 和 仁
	文化財専門員	川 原 和 生
	技 師	小 林 明 弘
	技 師	乗 松 真 也
	調査技術員	糸 山 晋
整理	主任文化財専門員	大 山 真 充
	文化財専門員	片 桐 孝 浩
	文化財専門員	木 下 晴 一
	文化財専門員	佐 藤 竜 馬
	主任技師	信 里 芳 紀

4. 調査にあたっては、地元の方々およびサンポート高松推進局・サンポート高松推進事務所をはじめ下記の方々から多くの協力を得た。記して感謝したい。

池澤俊幸 金原正明 厚 秀雄 後藤宏樹 日下正剛 齋藤潤花 乗岡 実 森村健一 松田直則
山本純代（敬称略）

5. 本書の執筆は藤好・古野・佐藤・信里・乗松が行い、乗松が編集した。また、遺物の実測は佐藤・乗松・山下登志子・岡野雅子・陶山仁美が、浄書は糸山・山地真理子・長谷川郁子・岡野・前田好美が、第14・15図の作成は佐々木博子が行った。

6. 挿図の一部は国土地理院地形図（1/50,000 高松北部）を使用した。

本文目次

I. 調査に至る経緯	
1. 発掘調査	(藤好) 1
2. 整理作業	(藤好) 1
II. 浜ノ町遺跡の発掘調査	
1. 調査対象地の位置	(乗松) 2
2. 調査の概要	(乗松) 2
3. 遺構と遺物	(古野・乗松) 3
4. まとめ	(乗松) 7
III. 高松城跡(西の丸町)の発掘調査	
1. 調査の概要	(乗松) 8
2. 基本層序	(乗松) 8
3. 遺構と遺物	(乗松) 10
4. まとめ	(乗松) 12
IV. 高松城跡(西の丸町)の資料整理	
1. 整理作業の概要	(佐藤) 14
2. 調査地点の変遷	(佐藤) 14
3. 「元和拾年」銘木簡の伴出遺物	(佐藤) 14
4. 出土瓦の分類・整理	(佐藤) 17
V. 西打遺跡の資料整理	
1. 本年度整理作業の概要	(信里) 24
2. 遺構・遺物から見た遺跡の消長	(信里) 24

挿図目次

第1図 対象遺跡位置図	1	第10図 北トレンチ北壁土層断面図	12
第2図 調査区割り図	2	第11図 SX1100位置図	13
第3図 遺構配置図	4~5	第12図 SD8B17出土遺物(1)	15
第4図 SDa09土層断面図	5	第13図 SD8B17出土遺物(2)	16
第5図 SDa09・白磁四耳壺埋納遺構・包含層 出土遺物実測図	7	第14図 高松城跡(西の丸町)出土の軒丸瓦(1)	19~20
第6図 調査対象地位置図	8	第15図 高松城跡(西の丸町)出土の軒丸瓦(2)	21~22
第7図 12J区遺構配置図	9	第16図 瓦刻印と各印出土層位	23
第8図 南西トレンチ南壁土層断面図	10	第17図 C区SD02出土遺物	25
第9図 SK12J03出土遺物実測図	11		

表目次

表1 サンポート高松総合整備事業に伴う高松城跡 (西の丸町), 浜ノ町遺跡発掘調査一覧表	1	表2 12J区遺構・遺構面对応表	9
		表3 対象調査区関係一覧表	14

写真目次

写真1 SXa22遺物出土状況(北東から)	6	写真3 白磁四耳壺出土状況(南から)	6
写真2 SXa04検出状況(南東から)	6		

I. 調査に至る経緯

1. 発掘調査

昨年度末から引き続き区画整理部の浜ノ町遺跡の調査を行ったが、当初の予算案作成時点で調査対象地であった駐輪場周辺部の2,022㎡が次年度送りになった。高松城跡では最後に残った対象地東南部の都市計画道の整備予定地とその北に位置する区画整理部が調査対象となった。12月末にこの調査を終了し、高松城跡のサンポート関係の発掘調査は完了した。発掘対象面積は、浜ノ町遺跡が3,035㎡、高松城跡の区画整理部が650㎡、都市計画道路の街路部が280㎡である。なお浜ノ町遺跡の調査対象地が減ったため、当初2班が通年担当する予定であった現場作業は、浜ノ町遺跡を4～11月で延べ14ヶ月、高松城跡の区画整理部と街路部をそれぞれ1班が12月に対応実施した。1～3月は、発掘から計画を変更し高松城跡都市計画道路の街路部とその他の区画整理部の基礎整理事業を実施した。発掘調査の状況は以下の通りである。浜ノ町遺跡は、西の浜の舟入の西側に位置し、船蔵等の施設の存在の可能性と、試掘調査で確認された中世の集落跡が想定された。調査の結果、昨年度末に検出した中世後半の大きな区画溝と共に掘立柱建物等を検出し、漁具が出土することから中世段階では漁村として機能し、近世段階でも地割り溝等を検出し、松平初期の様相を表すとされている高松城下図屏風と対比可能な資料が得られた。また高松城跡の発掘調査は、中堀推定地に近接することから堀の護岸石垣や、西の御下馬からの西の丸南の西新門への入り口部に近接することからその位置を特定する遺構の検出が期待された。街路部の調査では昨年度検出した南北方向の石積み基壇と溝の続きを検出し、中堀に沿う通路状の施設の存在が判明した。また区画整理部では下層の中世の割石を敷き詰めた施設が検出されるなど隣接地の調査と類似した遺構を検出した。

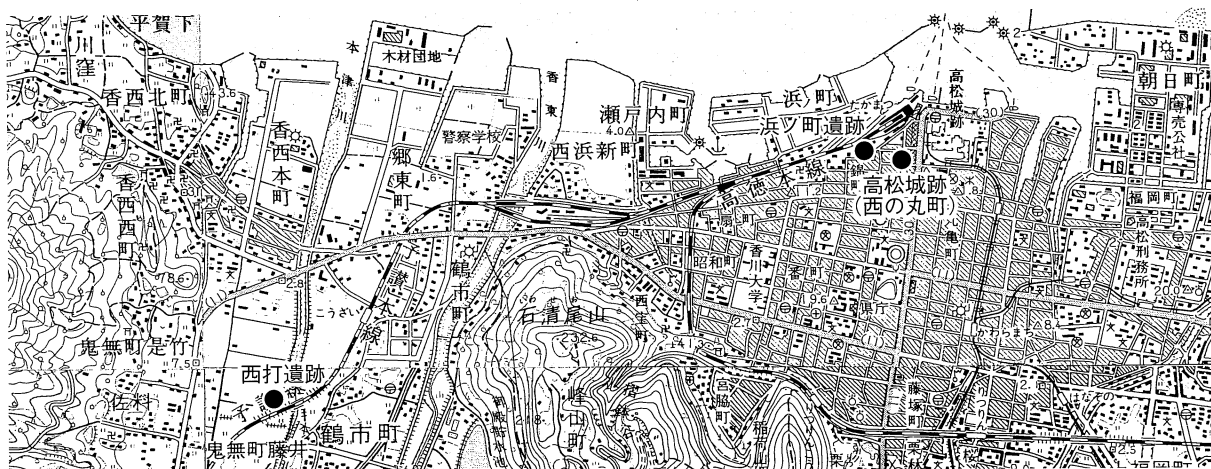
発掘調査面積一覧

遺跡名	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度予定	合計
高松城跡	900	3,639	300	9,492	930	0	15,261
浜ノ町遺跡	0	0	0	357	3,035	2,022	5,414
合計	900	3,639	300	9,849	3,965	2,022	20,675

第1表 サンポート高松総合整備事業に伴う高松城跡（西の丸町）、浜ノ町遺跡発掘調査一覧表

2. 整理事業

平成12年度の整理事業は、平成8年度～9年度にかけて発掘調査を実施した高松市香西南町・鬼無町西打遺跡と平成7～8年度分の高松城跡の発掘調査の整理を実施した。（藤好）



第1図 対象遺跡位置図 S=1/50,000

II. 浜^{はまのちょう}ノ町遺跡の発掘調査

1. 調査対象地の位置

高松城跡（西の丸町）下層から11世紀後半～13世紀前半の護岸状遺構が検出されているほかは、中世段階における周辺地域の状況は不明であるが、調査対象地の西に岡田氏の居館跡（現蓮華寺・若一王子神社）とされている場所がある。

近世段階では調査対象地は高松城外堀の西に位置する。絵図『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（推定製作年代1638～39年）では屋敷地は描かれていないが、『讃岐高松丸亀両城図 高松城下図』（17世紀前半）では、町屋の表現が見られる。『高松城下図屏風』（17世紀中葉?）では、外堀内とその周辺（主に侍屋敷）は屋敷地を堀で区画するなど、整然とした建物や町並みが描かれているのに対して、浜ノ町遺跡部分は明瞭な区画も見られず、海岸線に沿うように小さな建物が密集して描かれている。『高松城下図』（1716～36年）でも3軒の屋敷地として描かれ個人名も見られるものの、『元文5申年6月讃岐国高松地図』（1740年）では畑地となっており、その後の絵図では何も描かれていないか、「御用地」となっている。『小神野夜話』では「御船蔵南手、今御用地に成居申候所、是も侍屋敷にて御座候…」とあり、享保年間に御家人が減少したため侍屋敷が移転、縮小された（森下1996）こととおおよそ合致する。

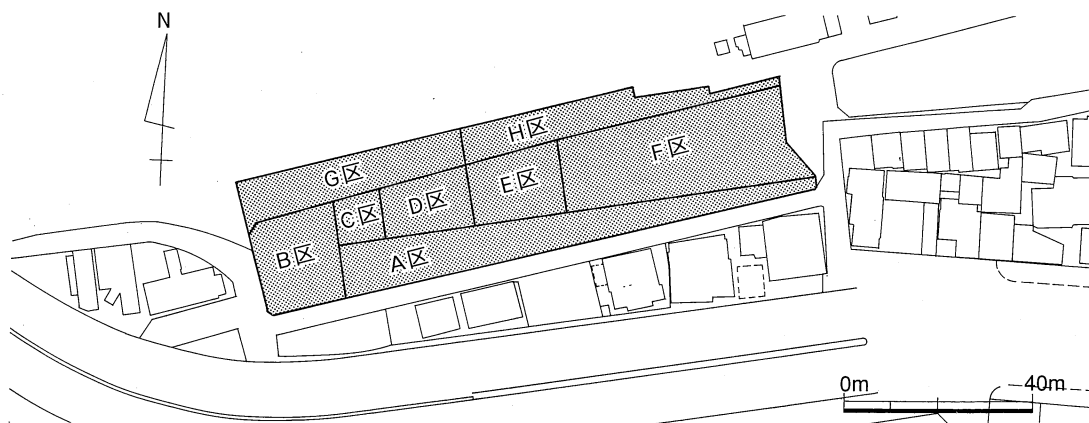
以上、江戸時代の絵図から得られる情報をまとめると、調査対象地は17世紀前半の生駒期には町屋となり、17世紀後半の松平初期には武家屋敷となるものの、18世紀前半～中葉以降には屋敷地としては機能していないこととなる。

2. 調査の概要

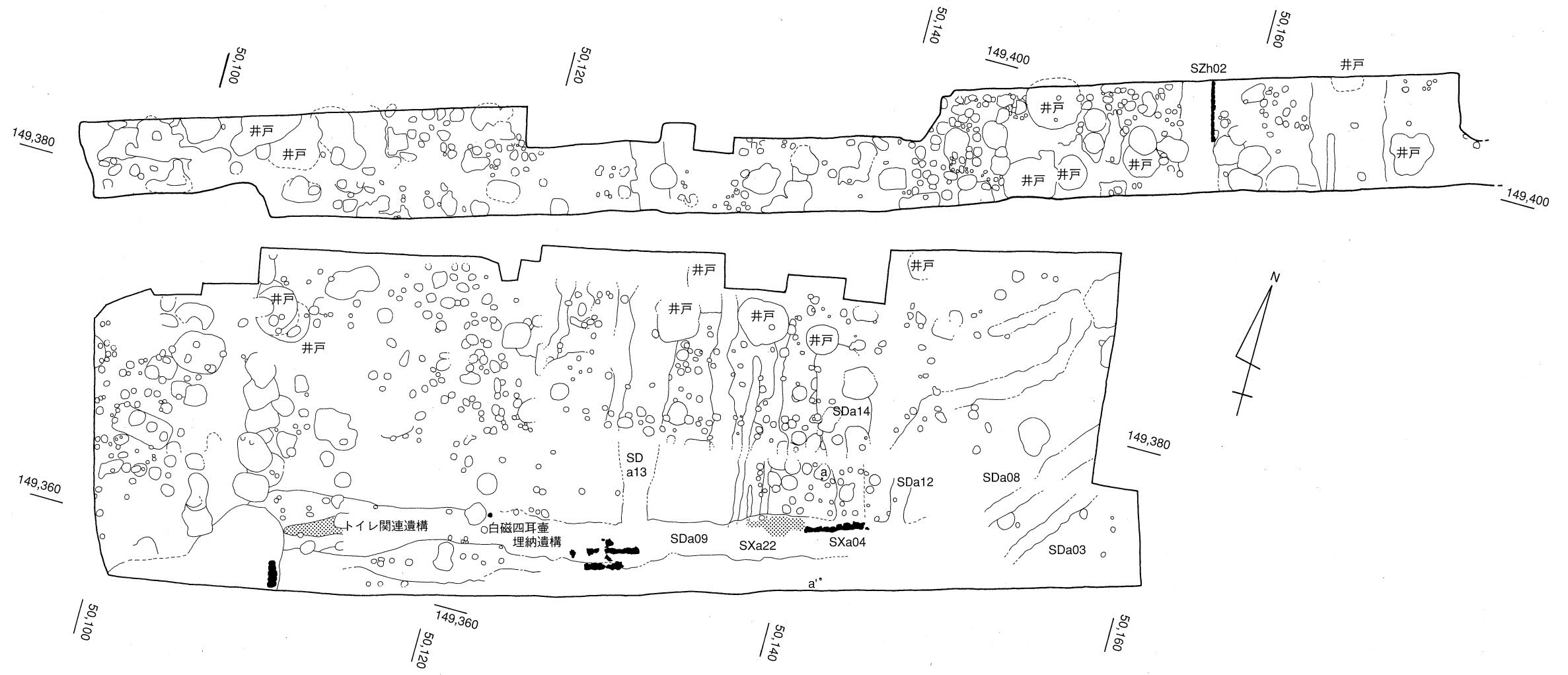
浜ノ町遺跡の発掘調査は昨年度（平成11年度）末からの継続して行った。調査はA～H区の8つの調査区に分割して行ったが、A区東半部、F区については近代～現代の攪乱により遺構は残存していなかった。

遺跡は砂堆上に形成されており、基盤層は灰黄色系の砂～細砂である。基盤層直上には褐色系の砂が堆積していたが、この層は中世前半と近世初頭を中心とする遺物を多く含むことから、生活に伴う土壌化層であると考えた。この褐色系砂層上（中）で遺構を検出するよう極力努めたが、多くの遺構は褐色系砂層下面（基盤層上面）での確認となった。

また、結果として同一面で検出した遺構は、中世前半と近世初頭の2時期のものが大半を占めるが、それぞれの時期の遺構を埋土の差によって認識することは困難で、遺物の出土していない遺構（特に柱



第2図 調査区割り図 S=1/1,600



第3図 遺構配置図 S=1/300

穴) に関してはその時期を確定できていない。本報告作成の際、状況証拠を積み重ねることによりこれらの遺構の帰属時期を判断する作業が不可欠である。

3. 遺構と遺物

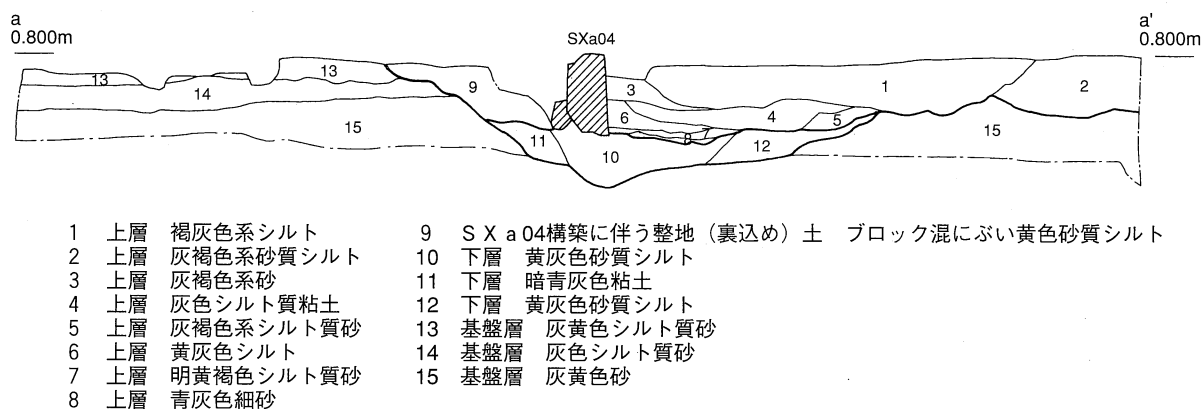
(1) 大溝 S D a 09

S D a 09はA・B区を東西に流れる大溝である。土層の観察から上・下2層に大別可能であり、下層 S X a 22出土遺物(第4図1・2)は13世紀後半~14世紀前半、上層出土遺物の漳州窯系青花碗(第4図3)と備前播鉢(4)は16世紀末~17世紀前半を示す。

下層段階ではS D a 09の検出最大幅は約3m、深さは70cmを測る。東端部は行き止まりとなっており、後述するようにトイレに関連すると考えられる土が堆積していた。

A区西部ではS D a 13に分岐し、西端部ではほぼ直角に北へ曲がりS D a 14に連続する。また、流路方向は高松平野の条里型地割の方向と合致しない。海岸線に沿って地割の設定が行われたためであろうか。

上層段階ではS D a 09東端部トイレ関連遺構・S D a 13・a 14は埋没し、S D a 09の西端はA区西端部で南(調査区外)へ向かい、東はS D a 03・a 08・a 12に連続して北東方向に流れる。(乗松)



第4図 S D a 09土層断面図 S=1/40

東端部トイレ関連遺構 S D a 09西端部南肩より溝底に向かう形で厚さ10~20cmの細砂を多く含む暗褐色のシルトを検出し、この中に多量のチュウ木とウリ等10種以上の種子片、甲虫の羽や骨格、蛆の蛹?などが含まれていたため、ここがトイレとして使われたかどうかは別にして、トイレに関連する土であると判断した。またチュウ木と見られる板片は数10m東のA区でも出土している。土が出た地点では溝内或いは溝肩にもピット等遺構はなかった。

チュウ木は図示した3種に大きく分かれる。第4図5・6は断面形状は異なるが長さは約15cmで揃う。7はこれで完形であるとすれば、使用法は現在のトイレトペーパーと全く同じと考えられる。

(古野)

杯の大量廃棄遺構 S X a 22 S D a 09からS D a 14へ曲がるコーナーの西部分で検出した。土師質土器の杯(第4図1)150個体以上と1点の十瓶山産須恵器杯(2)、数点の漆碗が集中して出土した。これらの器がほとんど完形か完形に復元できるものであることからすると、ほとんど使用されないか、1~数回使用したのみで廃棄されたものであると考えられる。

護岸施設 S X a 04 S D a 09の北岸で検出した。S D a 14・a 09下層埋没後に構築されている。五輪塔の火輪を、下面をS D a 09側に向けるかたちで並べた遺構で、前面の溝S D a 09からは多くの礫が出土した。同じく溝の肩部に火輪が並べられていたS Z h 02は、火輪の上に礫が積み上げられ、石垣状を呈

していた。S X a 04も同様に石垣状の施設であったと考えられ、前面の溝から出土した礫は本来火輪の上に積まれていたものであろう。S D a 09流路の固定化と護岸の役割を担ったものと考えられる。



写真1 S X a 22遺物出土状況（北東から）



写真2 S X a 04検出状況（南東から）

（2）白磁四耳壺埋納遺構

A区西部で検出した遺構で、径約25cmのピットの中に白磁四耳壺（第4図10）が直立するかたちで埋められていた。四耳壺内部からは土師質土器の杯（第4図9）約2/3が割れた状態で出土し、残りの約1/3は四耳壺の外のピット内から出土した。この杯の出土状況から、本来四耳壺の蓋として杯が使用され、後に土圧で割れた杯の一部は四耳壺の内部へ転落し、一部は外部に残ったものと考えられる。蓋の存在を想定すれば、当然四耳壺内には何かが入っていたと考えざるを得ないが、内部に堆積していた土の洗浄を行ったところ、前述の杯以外のものは確認できなかった。

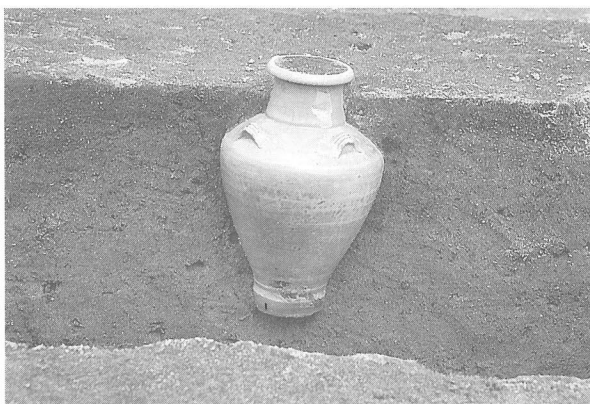


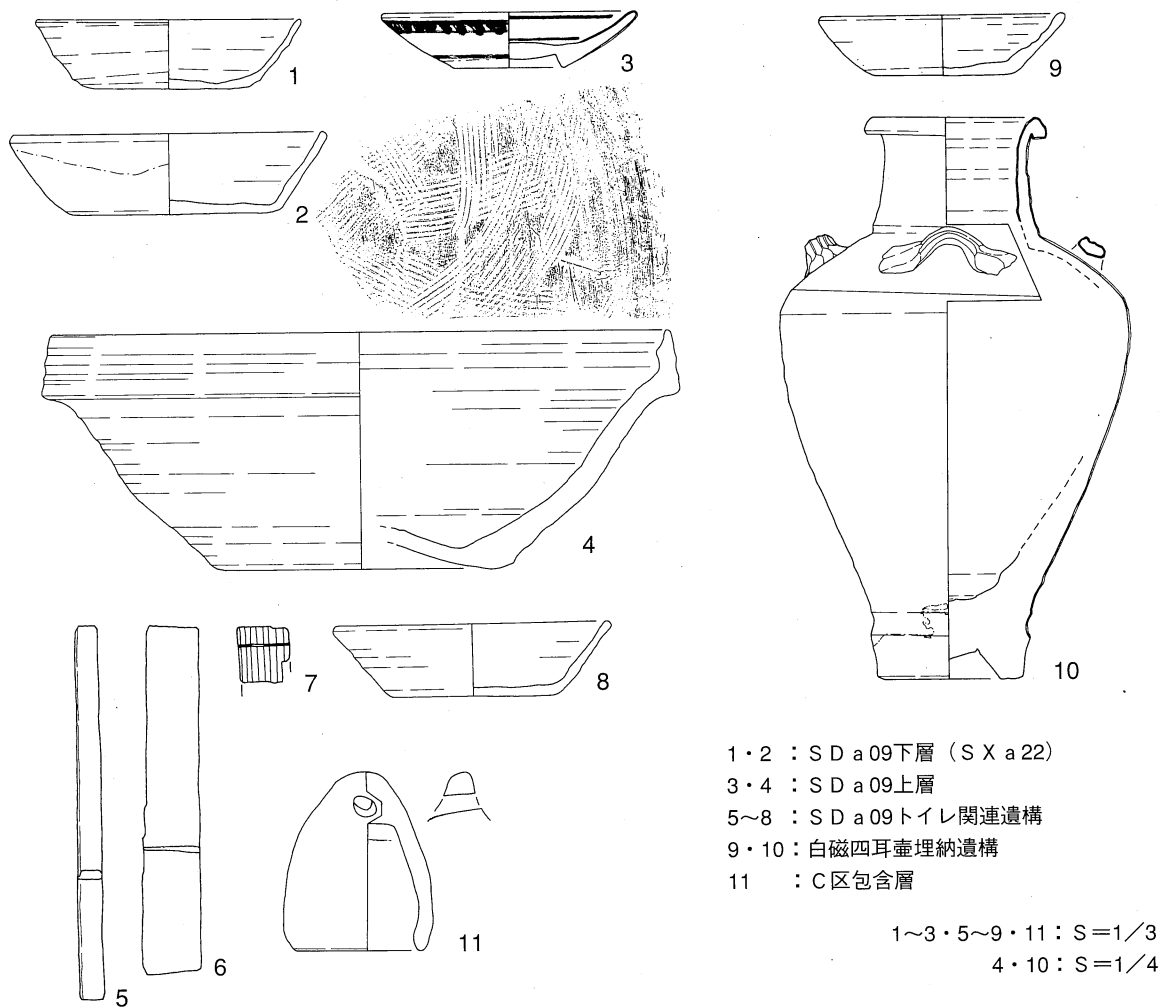
写真3 白磁四耳壺出土状況（南から）

また、「白磁のなかでも四耳壺・水注・梅瓶は特に武家に好まれ、戦国時代まで城館や居館跡から必ずといっていいほど出土」（望月1999）するとされるが、『日本出土の貿易陶磁西日本編』（国立歴史民俗博物館1993）で白磁四耳壺出土の遺跡種別の統計を行ったところ、都市（都城）・官衙を除けば、集落26・寺院11で城館は1遺跡のみであった。「集落」には性格が明らかでない遺跡も含まれているだろうが、城館や居館から白磁四耳壺は出土しても、白磁四耳壺の存在をもって、その遺跡を城館・居館とは断定できないといえよう。当遺跡についても「城館」「居館」であったかどうかは詳細に検討する必要がある。

（3）包含層出土イイダコ壺

C区包含層中からイイダコ壺（第4図11）が1点出土した。重量は112.0gである。包含層中の遺物は中世前半、及び近世全般のものを含むため、イイダコ壺の時期は限定できない。

イイダコ壺は香川県内では善通寺市、坂出市川津町周辺において6世紀末に出現し、古代に盛行するが、その多くは吊り手部上端面が孔に直交する方向に窪む形態である。一方、当遺跡出土のイイダコ壺は吊り手部上端面は丸くなっており、窪みは認められない。この窪みの有無は機能差を示す可能性が高いが、その差が期的なものなのか、地域的なものなのかはこれからの検討課題である。



第5図 S Da09・白磁四耳壺埋納遺構・包含層出土遺物実測図 S=1/3・1/4

4. まとめ

以上、浜ノ町遺跡では13世紀後半～14世紀前半を中心とする遺構を多く検出した。当該期の確実な建物は復元できていないものの、大溝S D a 09や井戸からは区画を持つ集落を推測できる。また、イイダコ壺や多量の土錘の出土は海浜部に立地する集落の生業的な側面を示している一方、白磁四耳壺埋納遺構は通常の集落と多少異なる様相を想定させる。

近世期においては16世紀末～17世紀前半の遺構が中心となっており、17世紀後半以降の遺構・遺物は少ない。この事実が調査対象地付近の土地利用状況の変化を表しているとするれば、1. で述べたような絵図に示されている状況、つまり屋敷地として利用されなくなるのが18世紀前半であることと時間的な相違があるが、この点については本報告時に検討したい。(乗松)

引用・参考文献

望月幹夫 1999 「武家文化の台頭」『日本の考古ガイドブック』東京国立博物館

森下友子 1996 「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅳ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

国立歴史民俗博物館編 1993 『日本出土の貿易陶磁 西日本編1・2・3』

Ⅲ. 高松城跡（西の丸町）の発掘調査

1. 調査の概要

高松城跡（西の丸町）は平成7年度から継続して調査を行っており、今年度12F・12J区の調査をもって終了した。12F区の北1/3、12J区の3/5は攪乱により遺構面が完全に破壊されていた。また、残りの部分についても、ほとんどが最終遺構面付近まで攪乱が及んでおり、多くの遺構は最終面での遺構検出となった。

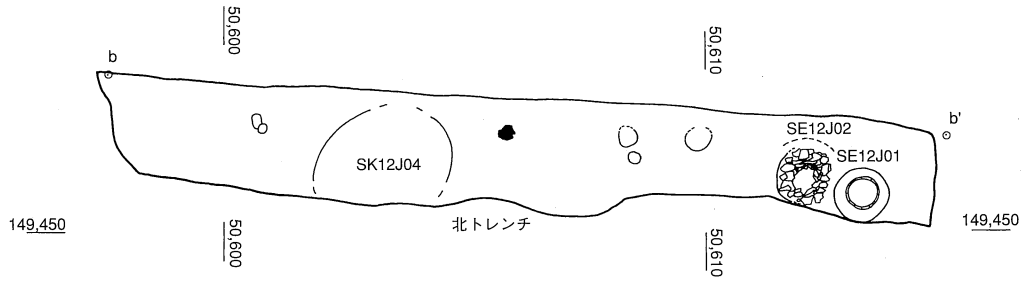


第6図 調査対象地位置図 S=1/2,500

2. 基本層序

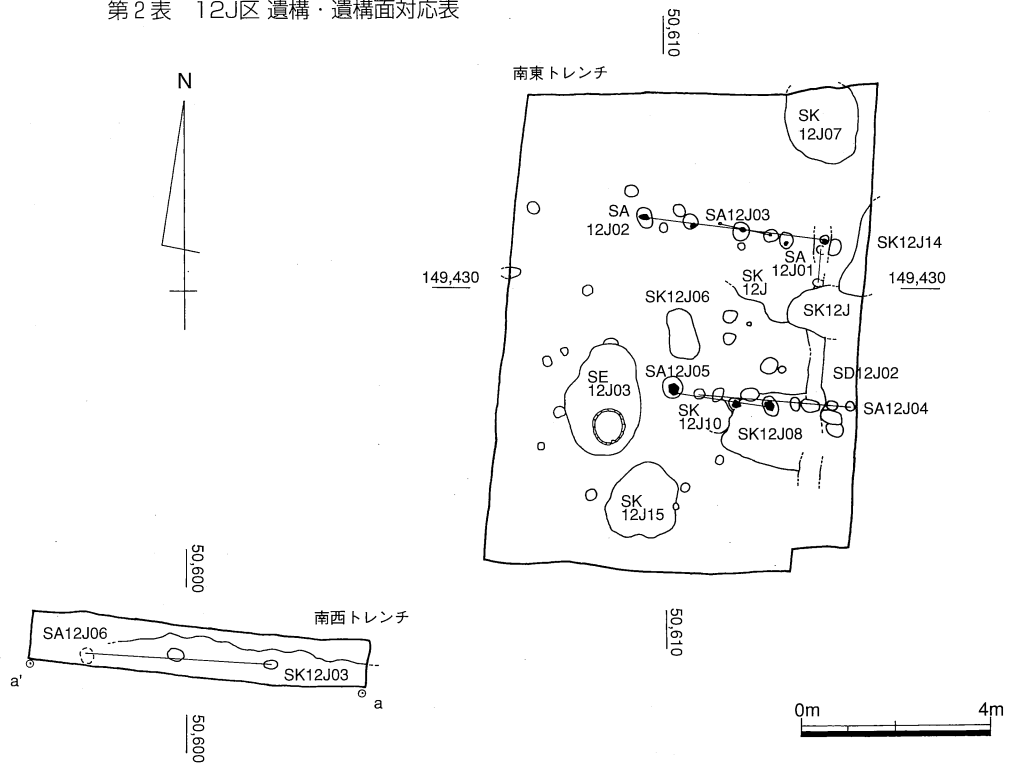
12J区南壁は平成8年度調査区南壁の東に連続することもあって、土質・標高から平成7・8年度調査時の土層との対応関係を読みとることができた。

遺構の掘り込みは確認しないものの、2層上面、3層上面、4層上面はほぼ平坦であることから遺構面である可能性が高い。土質・標高から、それぞれ平成8年度調査区の第1遺構検出面・下（2面・註1）、第1整地面・下（第4面）、第2整地面（第5面）に対応すると判断できる。また5・6層は遺構（SK12J03）埋土であるが、その上面（5層上面）の標高は第3整地面（第6面）の標高にほぼに対応する。

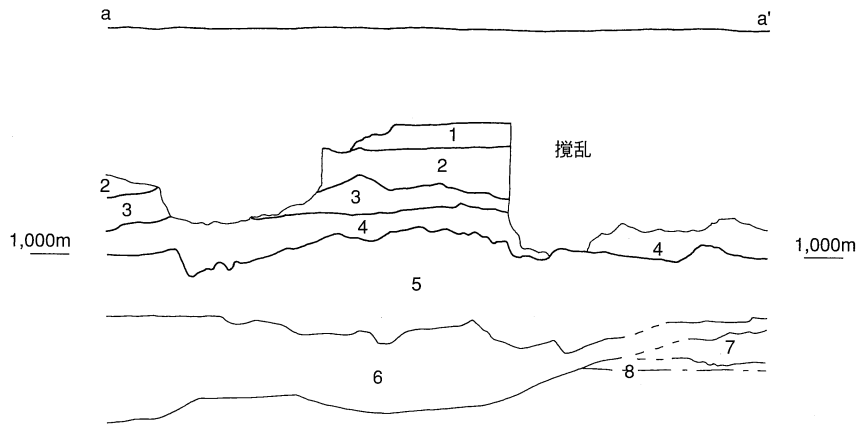


遺構	検出面	帰属面	備考
SK12J03	第3整地面	第3整地面	
SK12J04	第3整地面	第3整地面以上	瓦溜まり
SK12J06	第3整地面	第3整地面以上	
SK12J07	第3整地面	第3整地面以上	瓦溜まり
SK12J08	第3整地面	第3整地面以上	SA12J04・12J05を切る
SK12J10	第3整地面	第3整地面以上	
SK12J11	第1整地面	第1整地面以上	SD12J02を切る
SK12J12	第3整地面	第2 or 第3整地面	
SK12J14	第3整地面	第2 or 第3整地面	SK12J12を切る
SK12J15	第3整地面	第3整地面以上	炭水物集中堆積層あり
SD12J02	第1整地面	第1整地面以上	SK12J08・12J12を切る
SA12J01	第1整地面	第1整地面以上	SD12J02埋没後構築
SA12J02	第3整地面	第3整地面以上	礎石列・SK12J12を切る
SA12J03	第3整地面	第3整地面以上	杭列・SK12J12を切る
SA12J04	第3整地面	第3整地面以上	
SA12J05	第3整地面	第3整地面以上	礎石列
SA12J06	第3整地面	第3整地面	SK12J03を切る
SE12J01	第3整地面	第3整地面以上	井戸枠桶状
SE12J02	第3整地面	第3整地面	石組井戸
SE12J03	第3整地面	第3整地面以上	井戸枠桶状

第2表 12J区 遺構・遺構面対応表



第7図 12J区遺構配置図 S=1/160



第8図 12J区南西トレンチ南壁土層断面図 天地：S=1/40 幅：S=1/80

3. 遺構と遺物

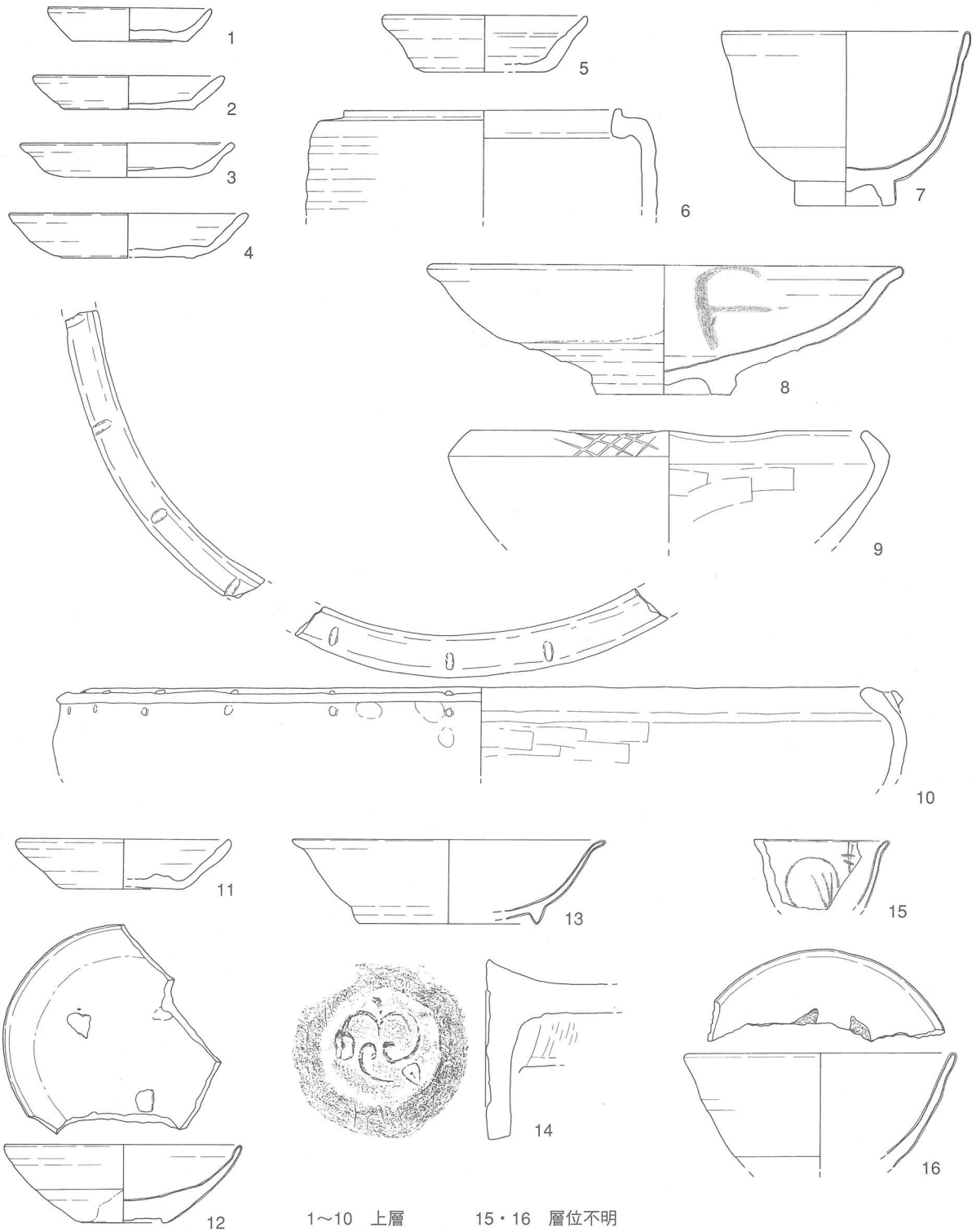
(1) 廃棄土坑 SK12J03

SK12J03は長楕円形（長方形）の大形土坑であると考えているが、その堆積状況は大別2層に分割可能である。下層は暗灰色粘土質シルト~粘土層で、上層はブロックを含む砂質シルト~砂質シルト層で構成されている。上層と下層の境界にはオリーブ色系の土が帯状に堆積（変色？）していることから、SK12J03は一定期間機能し（放置？され）た後、埋め戻されたと考えられる。そのため、下層と上層の間には多少の時間差が生じている可能性がある。

前述のとおりSK12J03は、平成8年度調査区の土層との連続関係から第3整地面（6面）に属する遺構と判断できるが、ここでは、出土遺物を提示することでその整合性を検証することとしたい。

第8図1~5・11は土師質土器小皿である。製作上の特徴から数種類に分けることが可能である。6は備前の無頸壺である。7は肥前系陶器の椀である。白色を呈し、釉は高台の外表面までかかっている。8は肥前系陶器の皿である。内面に「F」字様の模様が描かれている。9は口縁部外面を叩いて格子目状の模様を施している土師器の鍋である。口縁部は約2/5程度しか残存していないが、おそらく格子目状の叩きは4ヶ所にあったものと思われる。また在地産の鍋に比べて、胎土は粗い砂粒をほとんど含まず、焼成も良好である。10は内面に煤が付着していることから、土師器の火鉢、もしくは鍋かと思われる。口縁部には穿孔がみられる。同様の遺物が東ノ丸（歴史博物館地区）SK02から肥前系陶器の皿と共伴して出土している（北山2000）。その底部には、短めの足が接合されていたであろう痕跡が認められることから、この遺物は置いて使用したものと思われ、口縁部の孔は吊すためのものではないと考えられる。12は肥前系陶器の皿である。底部内面には胎土目が確認できる。13は中国製白磁の皿である。14は草文状の文様を施す軒丸瓦である。15は肥前系磁器の小杯である。16は底部内面に砂目がみられる肥前系陶器の椀である。

以上、出土遺物がおおむね17世紀前葉を示すことから、出土遺物からみても、当遺構が掘り込まれている遺構面は従来の第3整地面（第6面）と考えて問題無いといえよう。



1~10 上層
11~14 下層
15・16 層位不明

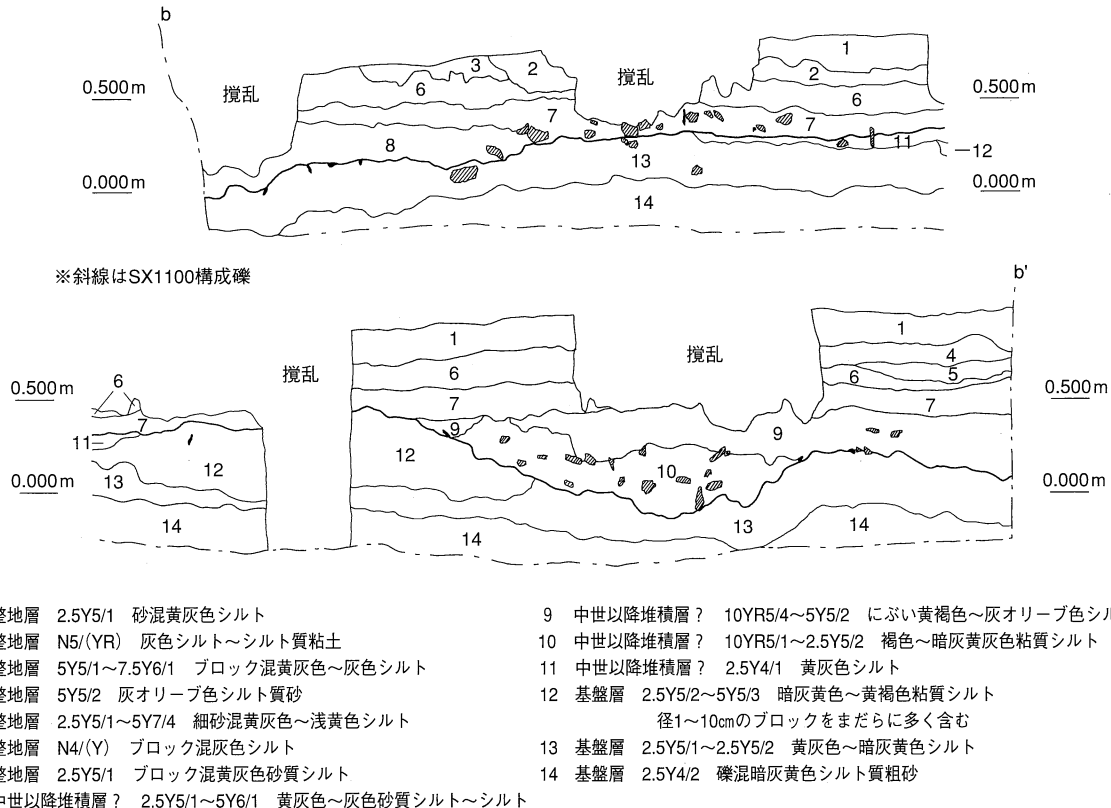
1~7・11~13・15・16 : S=1/3 8~10・14 : S=1/4

第9図 SK12J03出土遺物実測図 S=1/3・1/4

(2) 護岸状遺構 S X1100

S X1100は、主に赤色を呈する拳大の板状安山岩を敷き詰めた遺構で、12J区北トレンチで検出した。過去の調査でも部分的に検出しており、今回検出した部分は11E区南端部から連続するものである。東西ラインの土層と標高から、当遺構が北から南に、中央から東西に向かって緩やかに傾斜していることが分かる。この遺構が水際に築かれた護岸状の遺構であるとすれば、その分布と傾斜方向から当時の地形を復元する手がかりとなるであろう。

過去の調査分も含めて、当遺構からは11世紀後半～13世紀前半の土器が出土しているが、瓦器をはじめとした他地域産の土器の比率の高いことが大きな特徴である。



第10図 12J区北トレンチ北壁土層断面図 天地：S=1/40 幅：S=1/80

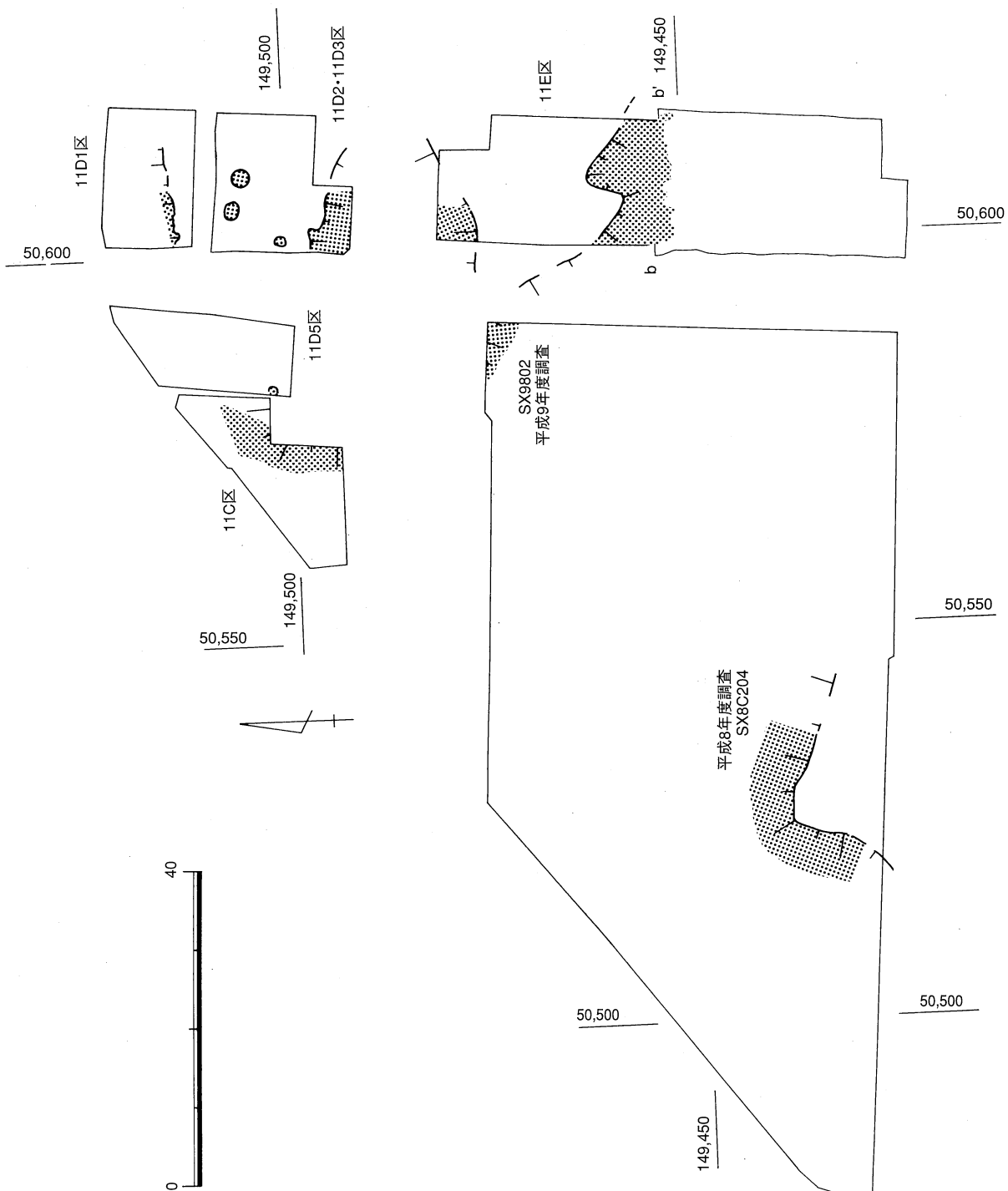
4. まとめ

1. で述べたように今年度の調査対象地内での遺構の残存率は極めて悪かったが、その割には調査の成果は大きかったと言える。例えば、S D11H01から連続するS D12J 02の確認は、中堀に並行する区画施設が11H区から12J区まで存在したことを示している。また、S K12J 03は8B区で検出した大型土坑S D8B17と近い位置にあることから、生駒期における屋敷内の建物配置や屋敷割を復元する材料となり得る。(乗松)

註1 遺構面の呼称について、ここでは従来の概報に従い第1遺構検出面～第3整地面という言葉を使用するが、正報告で使用される第1～7面という名称も()内に記した。正報告での遺構面名については本概報Ⅳ.2を参照されたい。

引用・参考文献

北山健一郎 2000『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡』香川県教育委員会ほか



第11図 SX1100位置図 S=1/800

IV. 高松城跡（西の丸町）の資料整理

1. 整理作業の概要

今年度は平成7・8年度調査区の資料整理を行った。当該調査区の出土コンテナ数は1,208箱である。平成13年度まで継続して整理を行い、報告書印刷業務は平成14年度の予定である。なお、発掘調査の概要については既刊の概報を参照されたい。今年度は整理作業員8名で、当該調査区の出土遺物の注記・接合・実測、主要遺構出土遺物の破片数カウント、出土瓦の分類・整理、高松監獄に伴う窯業関係遺物の分類、検出遺構・層位関係の基礎整理を行った。

2. 調査地点の変遷

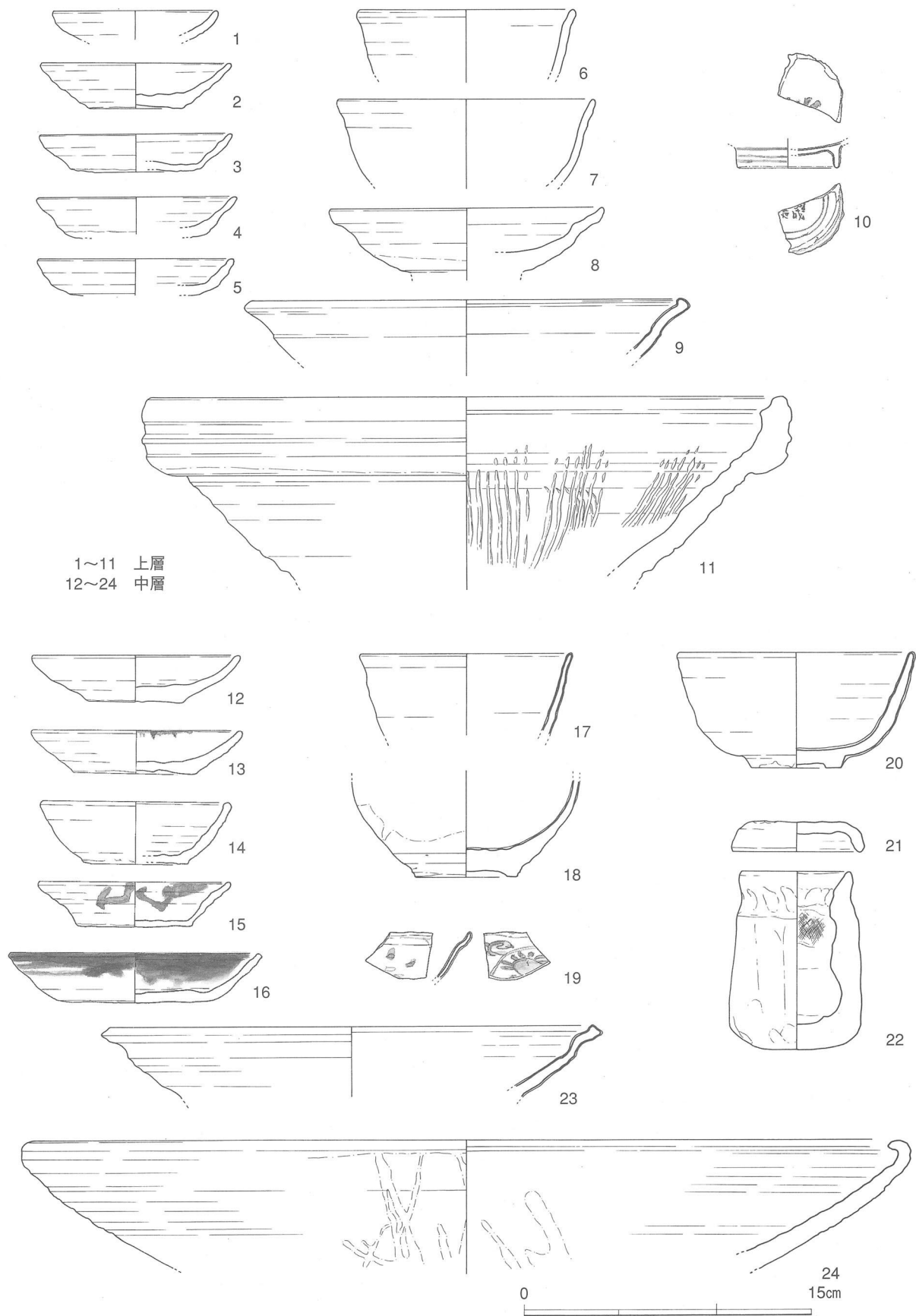
当該調査区では6面の近世遺構面と、その下位の中世遺構面が検出された。各遺構面の呼称については平成8年度の概報に記したが、各面に伴う主要遺構の組み合わせと基本層序については今年度の資料整理によって一定の見通しを得ることができた。このため正報告では、新規に第1～7面という呼称をとることとした。発掘時の遺構面との対応関係は第1表に示した。近世遺構面（第1～6面）での最大の画期は、第5面から第4面への変化である。第5・6面で複数存在した屋敷割が整理され、第4面では単一の屋敷地（大老久保家）となっている。出土土器・陶磁器から第4面は18世紀前葉の幅で捉えることができること、また第4面の構成土中に焼土粒が含まれていることから、享保3年（1718）に外曲輪武家屋敷の大半が焼亡した高松大火を契機に新たな屋敷割の行われたことが想定される。平成8年度概報に記述したように第2面の廃絶要因も火災が想定でき、文政4年（1821）の西通町からの出火による可能性がある。

遺構面	発掘時の呼称	遺構・遺物	一括資料	肥前陶磁	年代	関連事象
第7面	第3整地面下層	汀線に護岸・杭。舟着場遺構か(12世紀)	○		11C後	野原庄立券
第6面	第3整地面	道路の両側に溝・柵による複数の屋敷割 上坂勘解由屋敷への木材荷札(元和10年)	◎	I期	1588	高松築城
			◎		1640	生駒騒動。上坂勘解由切腹 松平氏入部。
			○	II期	1642	
第5面	第2整地面	第6面を踏襲した屋敷割。大型の甕倉 第5面構成土中に炭化物・焼土	○	III期	17C中 1718	城下・都市法の整備 高松大火。屋敷割の整理
第4面	第1整地面・下	屋敷割が1区画に統合される（大老久保家の屋敷） 藩主公族を示す家紋瓦	◎	IV期前半	18C前	調査地点は大久保家屋敷 （享保年間の城下絵図）
第3面	第1整地面・上	大型礎石建物による屋敷地内の区画	◎		IV期後半	1747 1765
第2面	第1遺構検出面・下	大型礎石建物 遺構面(土間?)が被熱し、上面に炭灰層	◎	V期	1787 1821	大久保頼裕の子頼郁が大老 西通町より出火
第1面	第1遺構検出面・上	大型礎石建物・土塀・腰掛建物の整備	○		19C前	1869
		大型建物壊され、陶磁器・鑄造生産 「重禁銅」「明治廿六年」銘の木簡	◎		1872	大久保家屋敷地から懲役場 (高松監獄)へ

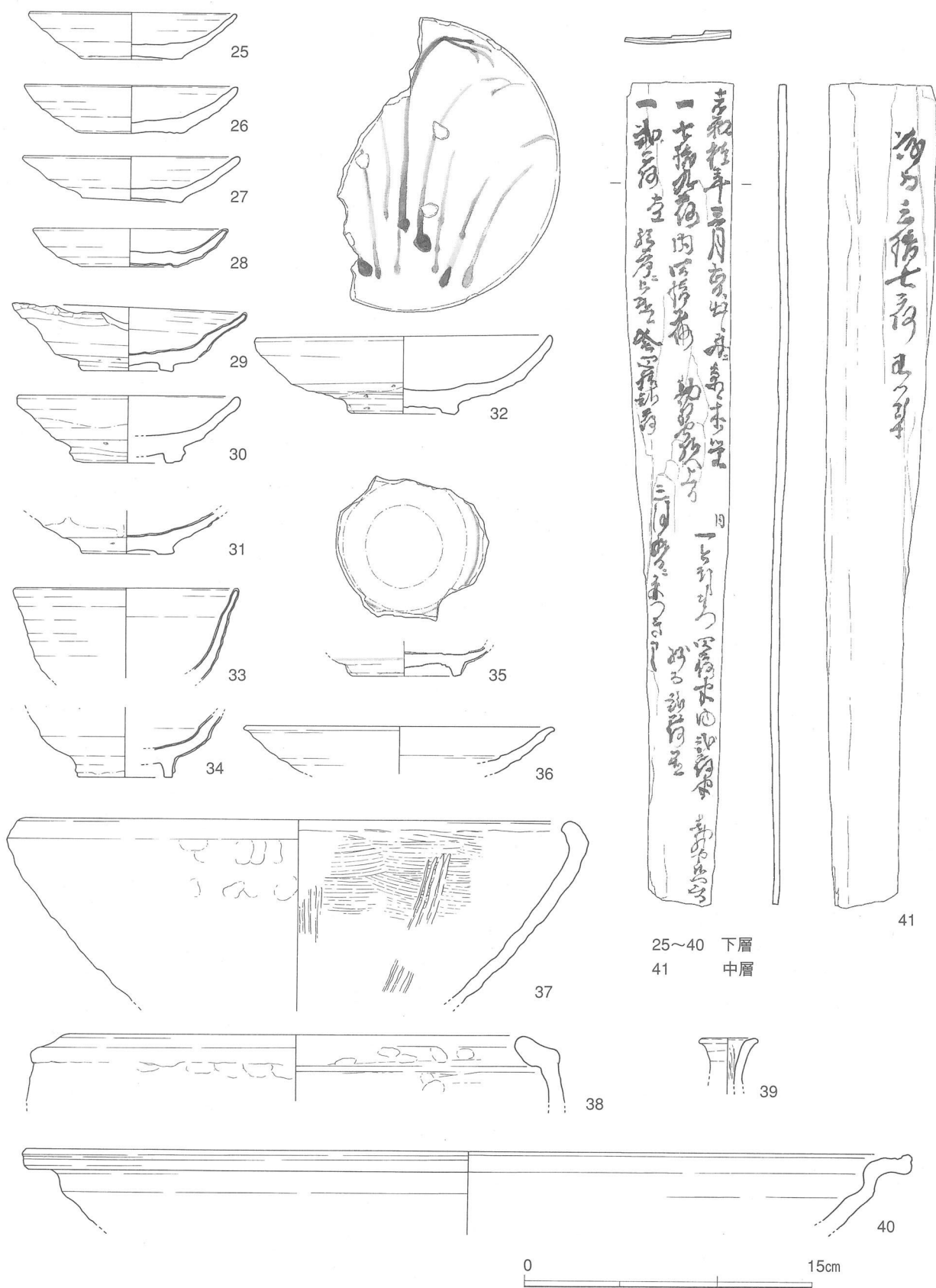
第3表 対象調査区関係一覧表

3. 「元和拾年」銘木簡の伴出遺物

大型土坑SD8B17は、8B区第6面で検出された大型土坑（東西9.2m、南北5.8m以上、深さ0.6m）であり、元和10年（1624）の紀年銘と生駒期の有力家臣上坂勘解由の名を記した木簡が出土した。記載内容については平成8年度概報に譲るが、出した土器・陶磁器（第1・2区）は近世土器・陶磁器編年にあたっての基準資料として扱えるものであり、主要な器種を図示した。



第12図 SD8B17出土遺物(1) (S=1/3)



第13図 SD8B17出土遺物 (2) (S=1/3)

S D 8 B 17の埋土は、上層（淡褐色ないし暗褐色系の砂混じりシルト）、中層（暗黒褐色腐食土）、下層（基盤層ブロックを含んだ褐色系シルト）の3層に大別できる。中層は木屑や樹皮などを多量に含んでおり、木簡（41）の出土層位である。中層・下層は廃棄行為により形成されており、上層は最終的な埋め戻し土とその後の沈下に伴う整地土とみられる。したがって、中・下層にはさほどの時間差は見出せないが、上層は時間的に若干隔たる可能性がある。

在地産の土師質土器には、複数の系統が存在する。長く外傾する体部と回転糸切りの底部をもつ系統（2・12・13・25～27）は、中層と下層とでは口径10～11cm前後にまとまっており、差異がみられない。しかし上層では口径9cm台であり、若干縮小化の傾向を指摘できる。また外反する体部と回転糸切りの底部をもつ系統（3・15）は、中層では比較的深手であるが、上層では浅手になっている。上層ではこの他にも浅手の皿が目立ち（1・4・5）、特に5は第3・4面に普遍化する系統の初現と捉えられる。これらから、上層と中・下層との間に区分が可能である。その他の在地製品としては、土師質土器播鉢（37）・把手付鍋（38）など中世後期から継続するものがあり、これらの中世的器種は第6面の最終段階に位置付けられるS X 8 C 2 0 3（17世紀中葉の肥前系磁器が伴出）までかなり認められる。

陶磁器では、肥前系陶器（6～9・17・18・23・29～34）、瀬戸・美濃系陶器（19・28）、備前陶器（11・24・39）、丹波陶器（40）、中国産磁器（10・20・35）、朝鮮白磁（36）がある。圧倒的に肥前系陶器が多く、胎土目の鉄絵皿（32）のような古相の個体も存在するが、これは見込みと高台畳付が摩滅しており、長期間の使用が想定される。また輸入磁器と瀬戸・美濃系陶器が少ない点も特徴で、1600～1610年代とみられる東ノ丸第4遺構面上層出土遺物と著しく対照的である。平成8年度概報で報告したS X 8 A 05出土遺物の内容とも併せ考えると、1610年代から1620年代にかけて肥前系陶器の堅調な増加、ならびに瀬戸・美濃系陶器と輸入磁器の激減が進行したことが窺える。

4. 出土瓦の分類・整理

（1）軒瓦の文様と出土層位

軒瓦は、近世の各遺構面と整地層から多量に出土しているが、文様系統の整理や形態・技法の分類による検証が不可欠と考えられ、全点の本来的な所属面（時期）を推測するまでには至っていない。また、遺構面を超えた瓦の継続使用現象と、単なる混入とを峻別する作業も行っていない。これらは次年度の課題であり、ここでは出土最古層位＝所属面とみて大過ないと思われる個体を図示した。なお第a面を被覆する整地層b出土瓦は、第a面に伴う資料として扱う。さらに城内（東ノ丸）や城下の町屋（紺屋町遺跡）、城下・郊外の寺院（法泉寺・願教寺・法然寺）には、当該調査区と同範もしくは同文の瓦がかなりの点数認められるが、全ての資料の検討を終了していないのでここでは一部を指摘するにとどめた。

軒丸瓦（第3図） 837点を分類対象とし、同範を念頭に置いて285種を確認した。1種のみ巴文の変形した草文状の意匠がある（7）が、他の284種は三巴文（右巻き47種、左巻き237種）である。三巴文には周辺に連珠を伴うものが273種、珠文を伴わないものが11種ある。

大まかな変遷としては他地域と同じであり、①巴頭部の明確化と肥大化、②巴尾部の短縮、③珠文の大型化と数の減少、④瓦当径の小型化、⑤丸瓦部の小型化と筵状圧痕・内叩きの顕在化、などに要約される。ただし、③・④は直線的な変化を辿るとは必ずしもいい難いようである。まず③の珠文数であるが、第6面では16個以上のものが一定量認められ、第5面から第3面にかけては伝世もしくは混入品を除くと16個以上の個体は存在しない。しかし第2面では、再び16個以上のものが出現しており、巴尾部の長い比較的古手の文様構成をとる。また8～10個の珠文数は第5面から第3面にかけて目立つが、第2面では伝世か混入品を除くとほとんどみられなくなる。④の瓦当径は、第6面で14～15cm台・12cm台・11cm前後、第5面から第3面で12～13cm台主体で少量の14cm以上となり、第2面では11～12cm台主体

で13cm台が少量伴うように、法量的にまとまりをみせつつ縮小化の傾向を示す。しかし、第1面では瓦当径12~13cm台に集中し、第2面よりも若干大振りになる。以上2点が注目される。

なお第6面出土瓦には、巴頭の中に「建宗」と陽刻するもの(5)があるが、これは内堀の浚渫で出土・採集され安藤文良氏が報告した個体(安藤1981)と同範とみられる。

軒平瓦(第4図) 415点を分類対象として184種を確認した。中心飾りから文様系統の把握が可能であるが、ここでは特異な桐文・四目文軒平瓦と、主体的な三葉文・巴文・宝珠文・半裁花菱文軒平瓦を取り上げる。なお成形技法の特徴としては、確認可能なものの大半が平瓦の広端部の凸面側に顎部を貼り足す「顎継足技法」によっている。また、瓦当面上角の面取りは第6面と第5面に認められるが、周辺地域での知見を参照すると、第5面での存在は第6面からの継続使用を示すとみた方がよいかもしれない。

桐文軒平瓦には、中心葉と両側葉の傾きが同じで輪郭線が交差する線描の1と、中心葉が両側葉の前面に表現される定型的な2がある。1の桐文は、高知城三ノ丸出土軒丸瓦(高知県埋蔵文化財センター2000)と同一意匠であり、「顎継足技法」によらず胎土も他者とはやや異なる。また後者は、東ノ丸県民ホール地点I期下層石垣背面石列瓦層出土瓦と同範で、岡山城跡本丸中ノ段出土瓦と同範もしくは同文である。

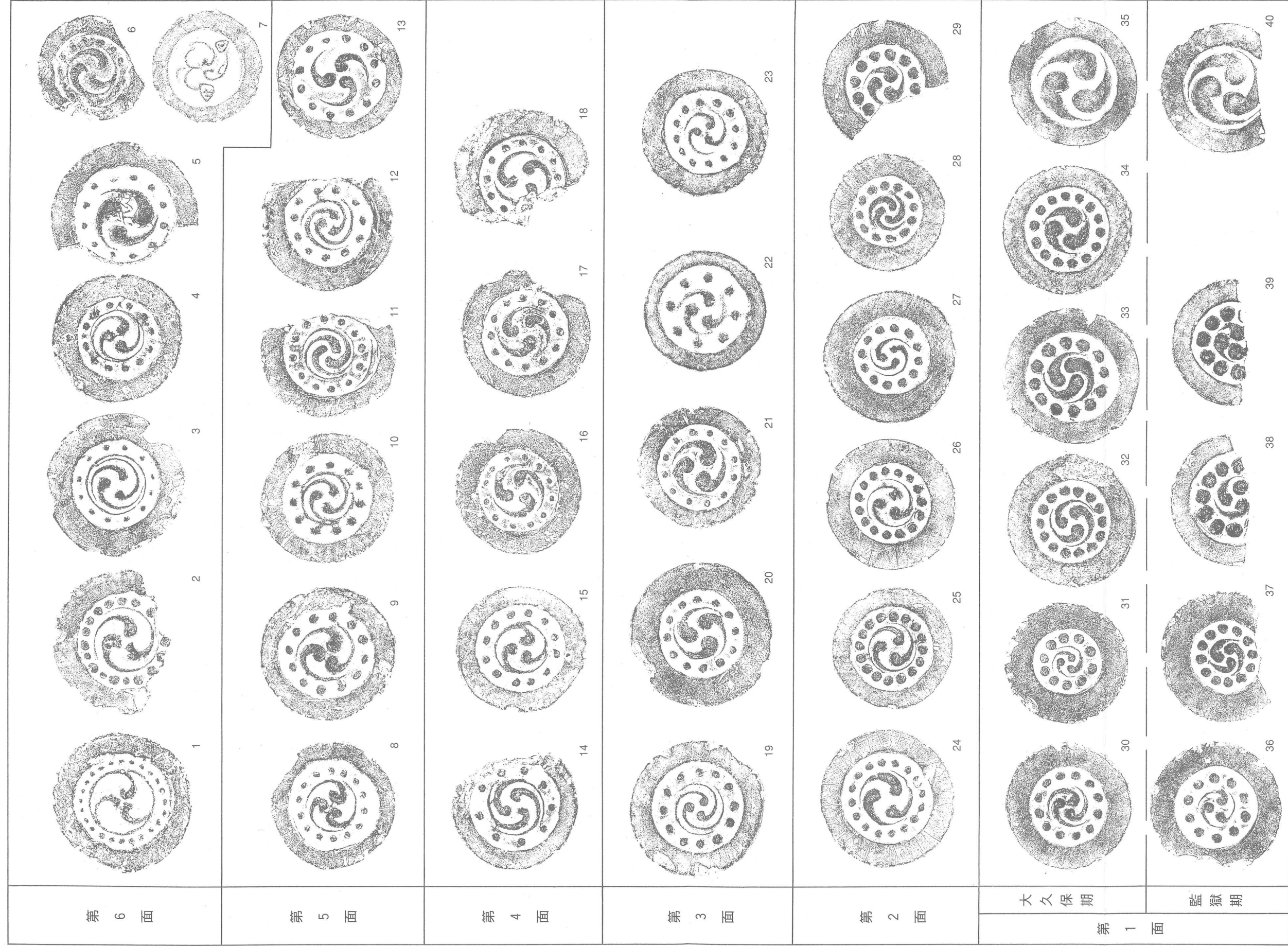
四目文軒平瓦は、第5面で出土している。四目文は丸亀藩京極家の家紋であり、当該資料が京極家家紋の表現であるならば、京極家の入部(万治元年:1658)以後に製作されたことになる。出土陶磁器から第6面から第5面への整地年代は1650年代頃と思われ、瓦の年代観と伴出面との年代観は整合する。

主体的な軒平瓦の文様の消長をみると、三葉文が第6・5面、巴文が第4・3面、宝珠文が第4・3・2面、半裁花菱文が第3・2・1面となる。三葉文主体(第6・5面)から巴文・宝珠文・半裁花菱文の混在(第4・3・2面)、さらに半裁花菱文の卓越化(第1面)という変化を辿る。第6面に伴う三葉文軒平瓦(4)は、岡山城本丸中の段で同範もしくは同文が確認でき、17世紀第1四半期に位置付けられている。巴文軒平瓦に伴う唐草文は、内側が下で外側が上に巻く岡山系三巴文軒平瓦(乗岡1997)と同じものもあるが、これと反対の巻き方をするものの方が多く、在地での生産が想定される。現在までの整理では、第4面に伴うものは巴の周囲に連珠をもつ。宝珠文軒平瓦は、第4・3面では宝珠の形態・大きさで複数の文様系統に分けられ、第2面ではほぼ一つの系統(18~20)に集約される。半裁花菱文軒平瓦は、第4・3面では中心飾りが肉厚なレリーフ状で唐草の輪郭を2重線で表現するもの(26~28)が主体である。26・28は帰属層位が明確でないが、東ノ丸歴博地点では第3遺構面上層で同範が確認でき、当該調査区の第3面を下限とするとみてよかろう。第2面では幅広の輪郭線で中心飾りを表現し、2回反転する唐草の外側に子葉を配する新たな意匠が出現する。この系統には、第1面段階にもさほど大きく文様構成を変えない一群(31~36)と、唐草をデフォルメする一群(37~41)の2者がある。

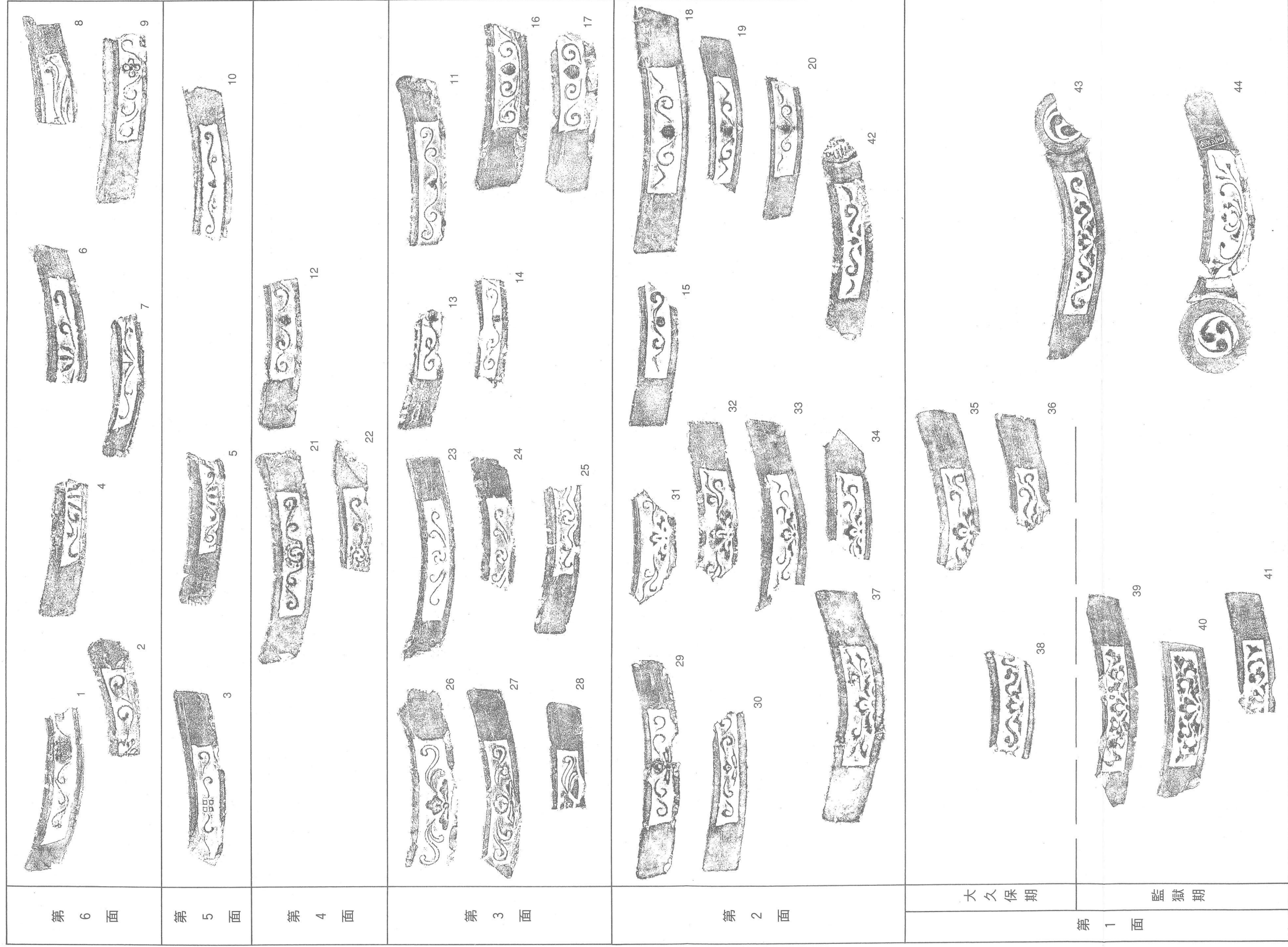
この他、軒棧瓦は第3面で巴文と半裁花菱文を中心飾りにもつものが出現していることが確実であるが、量的には少数にとどまったまま明治期に至っている。刻印17を施印した44は、宇多津の現存民家で同範もしくは同文例を確認することができる。

(2) 刻印瓦の変遷と生産地

刻印瓦は現段階で58点確認している。刻印の種類と出土層位については、第4図・第2表を参照されたい。記号刻印(1~11)と文字刻印(12~18)があり、大勢としては記号刻印主体(第5・4面)から記号・文字刻印の混在(第3・2面)、さらに文字刻印主体(第1面)へと変化するものと思われる。文字刻印のうち刻印12「い」は、他の文字刻印よりも早く第3面には出現しているが、生産地・屋号ともに現段階では明確でない。刻印13・14・15は、城下の新瓦町(木原1986)において近代まで操業していた瓦屋「水屋」と「玉屋」の刻印とみられる。刻印18「傳」は、香西寺土堀で鬼瓦のヘラ書き「御厩

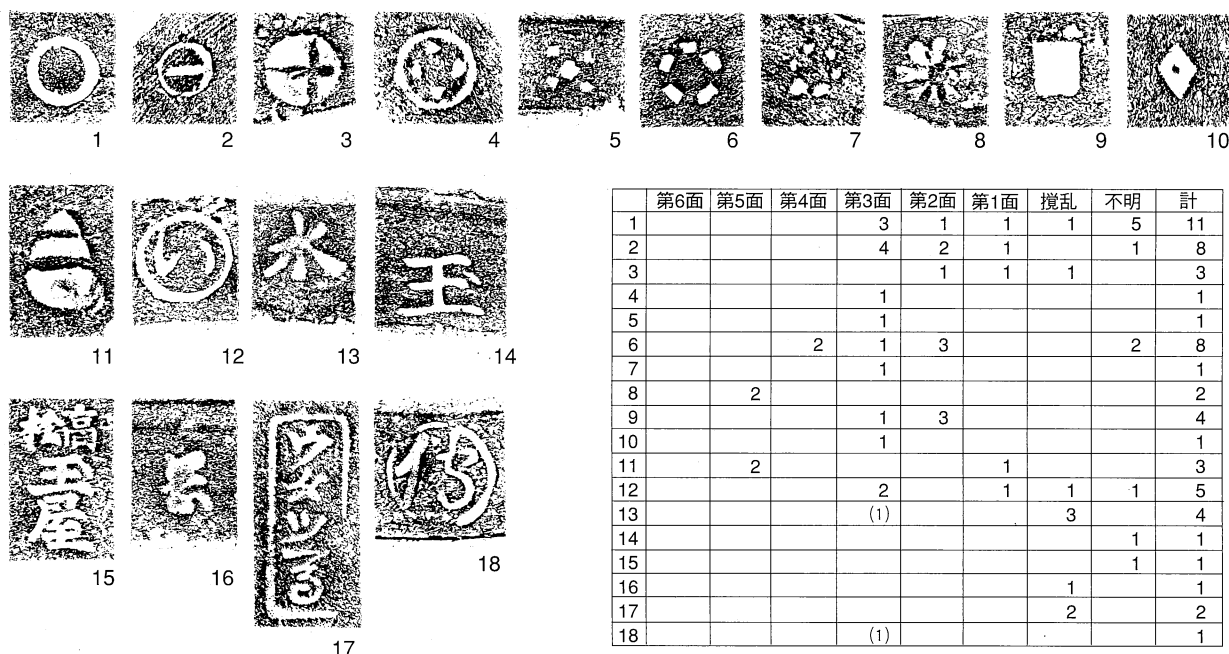


第14図 高松城（西の丸町）出土の軒丸瓦（S=1/4）



第15図 高松城(西の丸町)出土の軒平瓦 (s=1/4)

村／多田／傳右衛門」と軒平瓦（半裁花菱文）・平瓦「傳」刻印のセット関係があり、後者は刻印18と同印とみられることから、御厩村産の可能性が指摘できる。香西寺での軒平瓦の文様構成から第1面に伴う可能性が高い。刻印17「ウツ富(カ)」は宇多津村の瓦屋屋号と思われる、明治期以降の所産である。



第16図 瓦刻印 (S=1/1) と各刻印出土層位一覧

(3) まとめ

まとめると、以下の変化が重要である。第2面段階（18世紀末葉～19世紀前葉）における、三巴文軒丸瓦での復古的な文様構成の出現、宝珠文軒平瓦の文様系統の集約、半裁花菱文軒平瓦の新たな文様系統の出現。第1面段階（19世紀前葉～中葉）における、半裁花菱文軒平瓦の独占傾向と他系統文様の軒平瓦の激減。瓦刻印の変化では、文字刻印主体となる第1面段階が画期となる。

刻印15が施印された軒棧瓦や、東ノ丸県民ホール地点第3層出土「高松／水谷（屋）」刻印軒平瓦、さらに法然寺の「高松／水屋」刻印軒平瓦や香西・薬師寺の「高松／玉屋」刻印軒平瓦から、半裁花菱軒平瓦は新瓦町での生産が確実であり、香西寺土堀瓦から御厩・檀紙村での生産も確認できる。つまり上記した2つの画期は、新瓦町と御厩村周辺での瓦生産を基軸に展開したものと推測される。半裁花菱文は宇多津・坂出・飯山・綾歌を西限とする地域色の強い分布圏をもっており、共通した文様意匠を選択した両生産地の系譜関係が注目される。見通しとしては、新瓦町の成立と御厩村周辺での瓦生産の開始とは連動している可能性がある。丸瓦・平瓦も含めた製作技法や胎土の群別、さらに同範・同文関係の追求と絡めて、城下と近郊における瓦の生産・流通構造の一端を明らかにしていきたい。（佐藤）

参考文献（高松城跡関係の報告書・概報は省略した）

安藤文良 1981 「高松城の古瓦（上）（下）」『瀬戸内海歴史民俗資料館友の会だより』第3号・第4号

乗岡 実 1997 「第IV章第3節 瓦類」「第V章第5節 瓦について」『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会

高知県埋蔵文化財センター 2000 『高知城三ノ丸発掘調査現地説明会資料』

木原溥幸 1986 「新瓦町」『香川県の地名』平凡社

V. 西打遺跡^{にしうち}の資料整理

1. 本年度整理作業の概要

本年度の整理作業は、全作業期間の1年6ヶ月のうちの残り1年に相当する。平成11年度に整理作業が完了しているA1・B1・D区に引き続いて、B3・A2・B2・C区の整理作業を行った。なお、この平成11年度の整理作業の成果は『西打遺跡I』として報告書刊行済みである。

2. 遺構・遺物から見た遺跡の消長

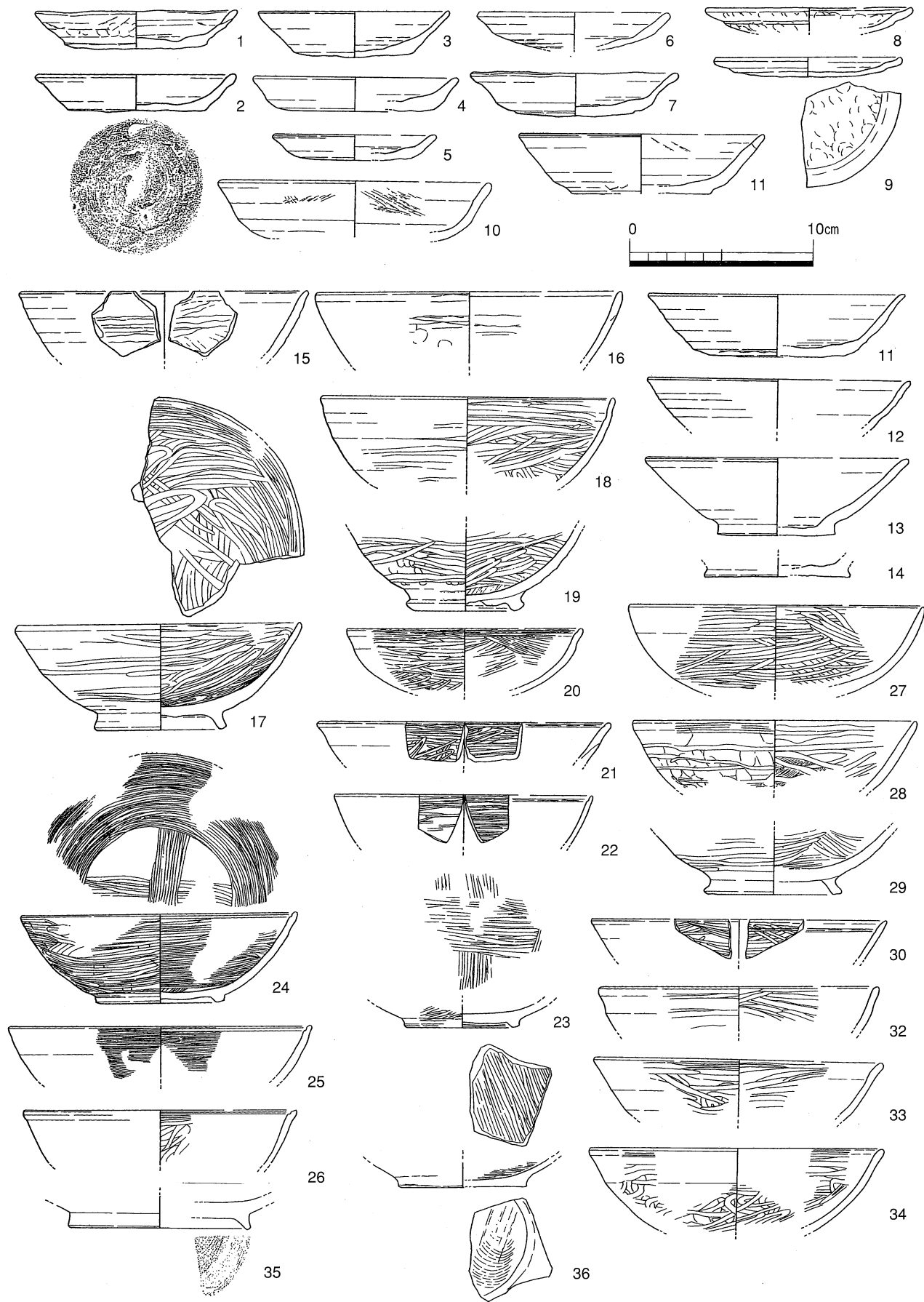
西打遺跡は、高松平野西部の本津川下流域の沖積平野上に位置する。現海岸線より約2km南方に位置し、標高は2～4m程を測る。

出土遺物の中で、時間的に最も遡る資料としてナイフ型石器や細石刃・細石刃核などの旧石器資料が挙げられる。大変遺憾ながら遺構・遺構面として確認できていない。特に細石刃・細石刃核は、讃岐地方において備讃瀬戸島嶼部地域以外での初見である。縄文時代では、A1・B1・C区において、前期の包含層（旧河道）を、C区において晩期前葉の土坑を1基検出しており、直接居住に関係した遺構は確認していないものの、集落に近接したエリアであったことが伺える。また、この縄文晩期前葉から弥生前期まで、遺構こそ確認していないものの各調査区において突帯文土器・弥生前期土器が出土することから、継続型の集落として、弥生時代を迎えていることも判明した。弥生前期土器は、突帯文系土器を確実に伴う初期遠賀川式土器と呼ばれるもので、現状で高松平野最古段階のものを含む。他弥生時代では、A2区において、竪穴住居2棟・掘立柱建物6から構成される終末期の小規模な集落を確認した。出土土器から、終末期の中でもこれまで高松平野であまり調査例が少なかった、終末期後半段階の比較的短期間の集落であることと、竪穴住居に対して掘立柱建物が主体となる点は、同時期の集落構成の一端を示す良好な一例となるだろう。

実体不明な古墳時代～古代前半期を経て、古代後半期から中世末期までの多くの遺構・遺物を確認した。ほぼ調査区全域において条里型地割溝とその中に営まれた集落を確認した。この内、条里型地割溝は出土遺物から10c後半代には開削され、何回かの掘り返しなどの維持行為を受けて中世末期まで継続している。また、この初現期である10c後半代の集落は見られない。11c末から12c世紀前半には、幾つかの単位に分かれて集落が出現する。B2区・C区では、40㎡前後の掘立柱建物を中心として5・6棟前後の掘立柱建物を取り付く形の建物群（屋敷地）を確認している。また、出土遺物には他地域からの搬入された遺物が目立つことも特徴的である。第17図は、C区SD02からの出土遺物の実測図である。京都系の皿8・9も見られ、両黒の20～26の楠葉型や、産地不明の27の両黒の椀も確認できる。35は東海の子茶碗である。

これらの建物群は、13c前半代にまで消滅ないし地点を変えて建物群が継続する。13c後半になるとD区では堀と土塁に囲郭された居館を、B3区では方形区画溝と内部及び外側に広がる建物群を確認した。ただ、B3区検出の方形区画溝は、調査範囲やその内部の遺構が十分に抽出できていない為、検討の余地を残す。また、D区の居館は14c前半代にB3区の建物群は15c末に消滅する。

以上、遺物・遺構から見た西打遺跡の消長を見てきた。本遺跡で特徴的なのは、中世前半・後半を通して、集落の変遷を追えることである。また、これらは他地域の「散村」「疎塊村」から「集村」といった単純な図式や類型論で捉えられるものではなく、周辺の遺跡の動態を考慮したこの地域内での位置づけが必要であろう。（信里）



第17图 C区SD02出土遗物

ふりがな	さんぽーとたかまつそうごうせいびじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいようほうこく							
書名	サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告							
副書名	浜ノ町遺跡高松城跡（西の丸町）西打遺跡							
巻次	平成12年度							
編著者名	藤好史郎・古野徳久・佐藤竜馬・信里芳紀・乗松真也							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL 0877-48-2191							
発行機関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	2001年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数		
28 P	3 P	25 P	0 P	0 P	17 枚	3 枚		
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町	遺跡番号					
はまのちょういせき 浜ノ町遺跡	香川県高松市 浜ノ町・錦町	37201		134° 20' 40"	34° 20' 40"	20000401 ～ 20001031	3,035m ²	サンポート高松総合整備事業
たかまつじょうあと (にのまるちょう) 高松城跡 (西の丸町)	香川県高松市 西の丸町	37201		134° 30' 00"	34° 20' 40"	19951201 ～ 19970331/ 20001101 ～ 20011231	4,539m ² 930m ²	サンポート高松総合整備事業
にしうちいせき 西打遺跡	香川県高松市 香西南町・鬼無町	37201		134° 01' 8"	34° 19' 49"	19970401 ～ 19980331	25,673m ²	サンポート高松総合整備事業
所収遺跡名	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
浜ノ町遺跡	集落跡 城下町	鎌倉時代 江戸時代	大溝・建物・井戸		白磁四耳壺			
高松城跡(西の丸町)	外曲輪 (武家屋敷)	江戸時代	石垣・礎石建物・石組み・溝		陶器・磁器			
西打遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 平安時代～ 鎌倉時代	土杭・流路 竪穴住居・掘立柱建物 掘立柱建物・井戸・溝		ナイフ形石器・細石刃 縄文土器 弥生土器			

平成12年度サポート高松総合整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告

浜ノ町遺跡
高松城跡（西の丸町）
西打遺跡

編集 〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 高 東 印 刷 株 式 会 社